

# 鹿島市浜町皿山窯跡

—肥前地区古窯跡調査報告書 第10集—

1 9 9 3 ・ 3

佐賀県立九州陶磁文化館

## は　じ　め　に

当館は、昭和58年度から肥前地区の陶磁器窯の調査を進めてきました。肥前地区では、その中心地である有田皿山（有田町・西有田町・山内町）のほかにも、周辺の蓮池藩領・武雄藩領・鹿島藩領でも窯場が開かれ、陶磁器が生産されています。当館ではこれまでに蓮池藩領の吉田1・2号窯（嬉野町）、志田西山1号窯（塩田町）の調査を実施しましたが、本年度は、鹿島藩領の浜町皿山窯跡を調査対象といたしました。

浜町皿山窯は、江戸時代中期に開窯され、昭和の戦前期まで操業が続けていた窯です。これまで、その存在は知られていましたが、特質については十分明らかにしていませんでした。今回の調査では、幕末から明治時代にかけて操業された窯の構造と製品の実態が明らかになりました。

本書を刊行するにあたり、ご指導、ご協力いただいた関係各位に深く感謝いたします。

平成5年3月30日

佐賀県立九州陶磁文化館

館長 田中耕作

# 例 言

1. 本書は平成4年6月1日から6月10日に実施した佐賀県鹿島市浜町甲1066-1・甲1064・甲1018に所在する浜町皿山窯跡の発掘調査報告書である。
2. 本書の執筆は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを渡辺芳郎が、Ⅳ・まとめを大橋康二が担当した。編集は大橋と合議の上、渡辺がおこなった。
3. 遺跡の測量・実測・写真撮影は調査参加者全員が担当した。
4. 出土遺物の実測はおもに田代由香利・岩永憲二郎が担当した。また出土遺物の写真撮影は渡辺と岩永が担当した。
5. 本事業については、次の方々のご協力を得た。記して感謝の意を表する。  
鹿島市教育委員会 同教育長 迎 昭典 同生涯学習課長 平尾 弘義  
同社会教育文化係長 竹下 勇  
地権者；松尾幸弘・山下鐵美  
調査参加者；加田隆志・太田昌美・山崎公和（鹿島市教育委員会）・澤田宗順（八代市立博物館未来の森ミュージアム）・田代由香利・鈴木靖子・釘尾実・田中熊男・豊村昭八郎

# 本 文 目 次

Ⅰ 調査の経過	1 頁
Ⅱ 遺跡の概要	2 頁
Ⅲ 遺 構	7 頁
Ⅳ 遺 物	11 頁
ま と め	21 頁

## 挿 図 目 次

Fig. 1 古窯跡位置図

Fig. 2 浜町皿山窯跡地形図

Fig. 3 浜町皿山窯跡 I 区Aトレンチ東壁断面図・Bトレンチ北壁断面図・Eトレンチ北壁断面図・II区トレンチ北壁断面図

Fig. 4～8 浜町皿山窯跡出土遺物

付 図 浜町皿山窯跡 I 区平面図

## 図 版 目 次

P L .1-1 浜町皿山窯跡遠望

P L .1-2 浜町皿山窯跡 I 区全景

P L .1-3 浜町皿山窯跡 I 区Aトレンチ 火床境遺構 (西から)

P L .2-1 浜町皿山窯跡 I 区Aトレンチ全景 (南から)

P L .2-2 浜町皿山窯跡 I 区Bトレンチ全景 (西から)

P L .2-3 浜町皿山窯跡 I 区Aトレンチ 作業場遺構 (東から)

P L .3-1 浜町皿山窯跡 I 区Aトレンチ 柱穴遺構

P L .3-2 浜町皿山窯跡 I 区A・Bトレンチ接続部 奥壁トンバリ抜き取り痕 (北から)

P L .3-3 浜町皿山窯跡 I 区Bトレンチ中央部・Cトレンチ全景 (南から)

P L .4-1 浜町皿山窯跡 I 区Bトレンチ中央部 火床遺構 (西から)

P L .4-2 浜町皿山窯跡 I 区Eトレンチ全景 (西から)

P L .4-3 浜町皿山窯跡 I 区Eトレンチ 奥壁トンバリ抜き取り痕 (南から)

P L .5～10 浜町皿山窯跡出土遺物



# I 調査の経過

## 1. 調査にいたる経過

肥前地区の江戸時代の古窯跡は、佐賀県内だけでも約225ヶ所以上分布している。そのうち有田など佐賀本藩領内の窯の調査は比較的進んでいるが、支藩である武雄・鹿島・蓮池藩領内の窯の調査は遅れており、その特色も明らかでなかった。

当館では昭和63年度から平成2年度にかけて、蓮池藩領である嬉野町、塩田町の窯跡調査を実施し、有田周辺の地区の磁器生産の実態と特質を明らかにしてきた。鹿島藩領の浜町皿山窯においても、遅くとも18世紀から磁器生産がおこなわれていたことは、文献などにより推測されていたが、その実態については不明な点が多かった。そこで当館では、その調査の必要性を考え、上記の有田周辺地区の古窯跡調査の一環として、今年度、浜町皿山窯跡の発掘調査を実施した。

## 2. 調査組織

### ○調査団長

田中 耕作            佐賀県立九州陶磁文化館長

### ○調査員

大橋 康二	同 学芸課長
鈴田由紀夫	同 学芸課普及係長
宇治 章	同 学芸課学芸員
渡辺 芳郎	同 学芸課学芸員
前山 博	同 学芸課嘱託
岩永憲二郎	同 学芸課嘱託

### ○事務局

畑山 尚正	同 副館長
森 章司	同 総務課庶務係長
深町ゆく子	同 総務課主査
福島 晴人	同 総務課員

## Ⅱ 遺跡の概要

浜町皿山窯の操業開始年代について、『肥前陶磁史』には「万治年間（元年は297年前）内野山に來た鮮人陶工の三人の中の一人が此處に來て開窯したと云う口碑がある。宝永年間（元年は252年前）二代藩主直朝は土地八丁五反歩を免税地として付与し大いに陶業を奨励したので明治9年地租改正まで此の特典が持続されたのであった。」と記されている。<sup>注1</sup>しかし現在のところ、万治年間（1658-61）もしくは宝永年間（1704-11）の開窯を証左する資料は見られない。

また同書には「享保年間（元年は239年前）五代藩主直堅は従来の規模を拡大して特に此の地へ藩吏を置いて製陶業を監督することになった。」と記している。<sup>注2</sup>安永4年（1775）8月16日の『鹿島藩日記』には「享保三年、浜一騎の峠へ皿山相立て度、相願い、差免ぜられ、焼物焼立て候処、訳これ有る半ばにて相止め候」とある。また『鹿島年譜』には「享保六年、浜山ニテ陶器ヲ製ス」という記載があり、享保3年（1718）もしくは6年（1721）の頃、同地にて窯が操業されていたことがわかる。しかし『日記』に「相止め候」とあるように、一時期操業が中断されていたらしい。そののち安永4年8月に、武雄吉田焼物師の八郎右衛門が、皿山が再興されるならば協力する旨藩に願い出たのをきっかけに、吟味の末、再興が許可された。そして同年11月に辻の坊と称する修験者により、沓岐峠皿山御再興成就の式典が執り行われ、八郎右衛門を棟梁として、浜町皿山窯は再興された。<sup>注3</sup>

浜町皿山再興のさい、有田の陶工が公式・非公式に関与したことが、有田の『皿山代官旧記覚書』の記載から知れる。つまり、再興の翌年安永5年（1776）に、鹿島藩から陶工派遣の依頼があり、皿山代官が細工人と絵書きの派遣を許可し、その条件を管轄の庄屋が確認したという。その条件とは、援助期間は8ヶ月に限り、また有田の陶工は浜町皿山の陶工に指南（指導）してはならず、ただ製品を作るだけという厳しいものであった。その一方、安永6年（1777）の『旧記』によれば、有田の細工人数十人が鹿島に行ったという噂を聞き、皿山代官が偵察を出そうとしたが、事前に漏れ、何者かが飛脚で鹿島にいる職人に知らせたため、見ヶ役が責任をとって解任されるという事件が起こっている（史料1・2）。<sup>注4</sup>

文化年間（1804-17）に鹿島藩が佐賀本藩に提出した調書によれば、その頃の浜町皿山窯の窯は登り窯で、14間の長さであったこと、生産額は一登り焼き上げて、地売りにして、銭で約24、5貫目、積み荷にすると500俵余りであったこと、1年間で7、8回焼くこと、窯焼き人数は7人であることなどが記載されている。<sup>注5</sup>（史料3）。

明治10年代中頃に佐賀・長崎県で実施された、県下の陶磁器製造地の概況調査書によれば、「藤津郡八本木村字皿山」には、所有主4名の名が挙げられ、窯数は7基、間口は平均で奥行3間9合、横幅1間5合9杓、一窯の焼き上げは計118円10銭、火入れは1年で5回と記載されている。製品の「奈良茶碗、茶漬碗、皿、煎茶碗」は、すべて国内用であるという。1回の焼成に従事する職工の数は、細工人264人、絵書き475人、荒仕子（雑役夫）455人、雇女189人である。そのほか、職工の賃金、薪や陶土などの消耗品代などが記され、産出代価（売上高）は4,333円50銭という（史料4）。<sup>注7</sup>

浜町皿山窯はその後、昭和16年（1921）まで操業を続け、戦争による企業整理のため廃窯した。

注

1. 中島浩気著・永竹威編『肥前陶磁史』1955年 肥前陶磁史刊行会（1974年復刻 名著出版）
2. 注1文献
3. 佐々木勝「生産と交通」『鹿島市史』中巻 1974年 鹿島市
4. 鈴田由紀夫「鹿島の窯業について」『鹿島史談会』2号 1989年 鹿島史談会  
池田史郎『皿山代官旧記覚書』1966年 皿山代官旧記覚書刊行会
5. 注3文献
6. 注3文献
7. 前山博氏のご教示

## 史料1 『皿山代官旧記覚書』

（注4 池田文献 256頁より 傍点引用者）

安永五申申渡帳

上幸平山細工人 万太郎  
右同所絵書 彦兵衛

右之者、共今般鹿嶋壱岐峠焼物場所再興有之候処、細工人無人数ニ付、依頼右之人数雇入被差免候に候而ハ、彼地ニ而指南之儀ハ停止被仰付儀候、自身之細工計ニ而当八月十五日限雇入被差免候趣奉承知候条、日限罷帰会所可申達候、已上、

右私懸内細工人絵書共鹿嶋壱岐峠向八月十五日限雇入被差免候趣奉承知候、右日限罷帰候上御会所御達可申上候、已上、

庄屋

## 史料2 『皿山代官旧記覚書』

（注4 池田文献 450頁より 傍点引用者）

安永六酉申渡帳

一、其方義見ケル役申付置候ニ付、鹿嶋壱岐峠へ焼物再興有之場所へ、内山ノ細工人数拾人罷越居候由相聞へ候ニ付、右為見調、警固并其方罷越候様密々ニ申付置候ニ付、去ル七日朝ノ罷越筈之处、同日朝七ツ比鉄左エ門所へ罷出、兩人罷越候儀過ク相聞へ、飛脚相立候者有之候ニ付而ハ、罷越候而も何之詮も無之段、鉄左エ門へ申達候故、右之趣鉄左エ門ノ相達候ニ付、右飛脚相立候者何者ニ候哉相調へ差出候様申達置候処、其亘リ不ル差分口達書差出候、専鹿嶋へ罷越候自身ノ口外仕候処、右之次第と相聞候、役方相勤居候者ニ不相似合、至而不恙之至候、依之、役方差迦シ遠慮申付候也、

### 史料3 『鹿島藩日記』(文化3年(1806)3月16日)

(注3文献 285頁より 傍点引用者)

- 一、先達て御見<sup>とがめ</sup>咎に相成候、浜皿山焼物仕入れ主は伊万里町一番ケ瀬民右衛門と申す者にて御座候<sup>こと</sup>。
- 一、釜一登りにて積込釜数、拾四間御座候<sup>およそ</sup>。
- 一、一登り焼上げ、地壳にして、代錢、凡 貳拾四、五の儀に御座候<sup>(ママ)</sup>。
- 一、右、積荷に仕り候わば、俵数、五百表<sup>(ママ)</sup> 余、御座有る可き候<sup>ママ</sup>。
- 一、年中に火入数、凡、七度八度位にて御座候<sup>ママ</sup>。
- 一、釜焼人数  
梶山城次郎、楠田伊勢太夫、太郎右衛門、小十郎、長右衛門、弥次郎、弥右衛門  
<sup>しめ</sup>て七人にて御座候。
- 右、御<sup>たすね</sup>尋に付、御達し仕り候。是迄仕入れの義、伊万里其の外、時々<sup>まかり</sup>の取組にて焼方相整え罷<sup>まかり</sup>有義にて御座候。

以上。

庄屋 長右衛門

釜焼中

### 史料4 『明治十三年ヨリ同十六年迄、勸業課商工務掛事務簿』より

(長崎図書館蔵)

藤津郡八本木村 字皿山

所有主	岩永幸一 原忠知 楠田与平 安武峯太郎
窯数及間口	七個 平均入三間九合 横一間五合九杓
一窯製出	凡百拾八円十錢
火入レ度数	五度
製品分類	奈良茶碗 茶漬碗 皿 煎茶碗 総テ内国用
職工概数	細工人 二百六十四名 荒仕子 四百五十五人 但一度分 絵書 四百七拾五名 雇女 百八十九人
全 賃銀	細工人一人 卅錢 荒仕子 廿五錢 絵書 全 廿五錢 雇女 拾錢
一ケ年消費	薪 千六十六円三十壺錢 灰代 三百三円五十錢 陶土 九十六円五十錢 絵薬 三百四十壺円八十錢
全 産出代価	凡金四千百三拾三円五拾錢

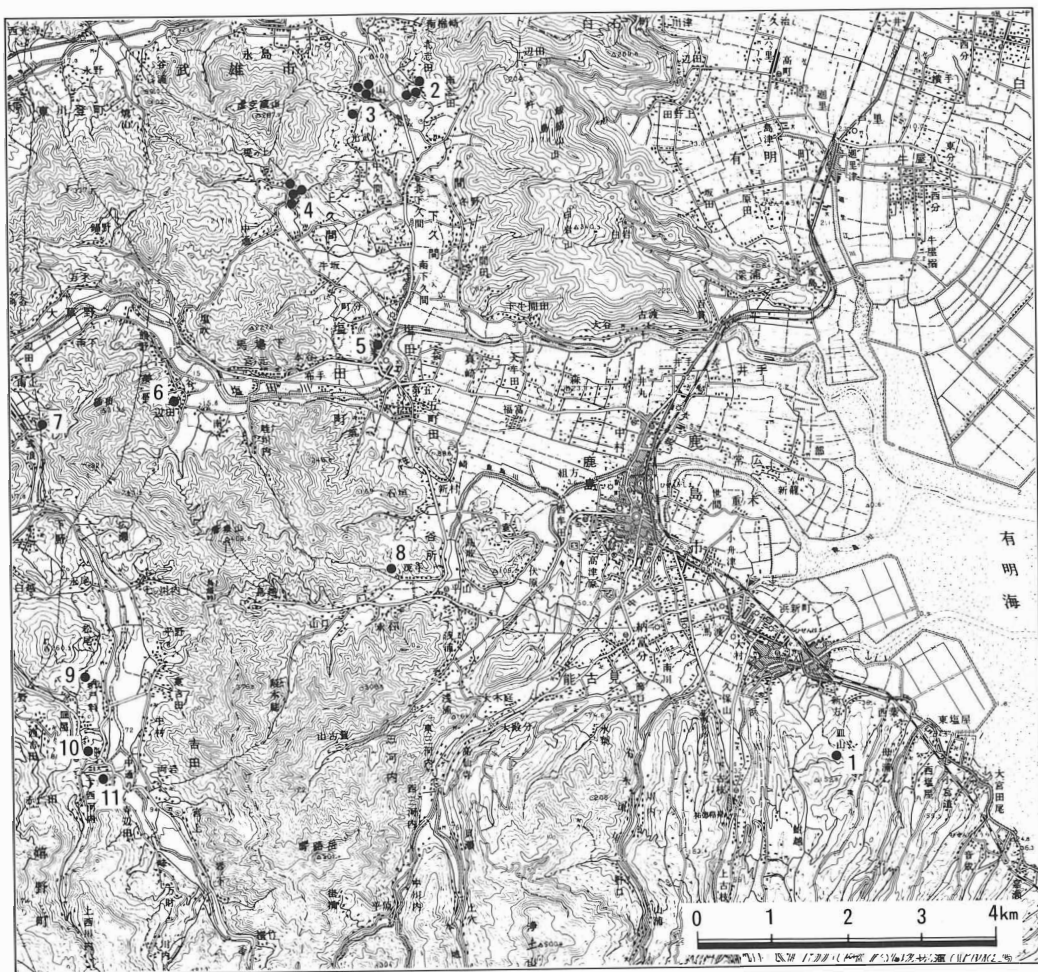


Fig. 1 古窯跡位置図

- |           |            |            |             |
|-----------|------------|------------|-------------|
| 1. 浜町皿山窯跡 | 2. 志田東山窯跡群 | 3. 志田西山窯跡群 | 4. 丹生野溜池窯跡群 |
| 5. 上福窯跡   | 6. 美野窯跡    | 7. 大草野窯跡   | 8. 本源寺窯跡    |
| 9. 祇園遺跡   | 10. 吉田2号窯跡 | 11. 吉田1号窯跡 |             |

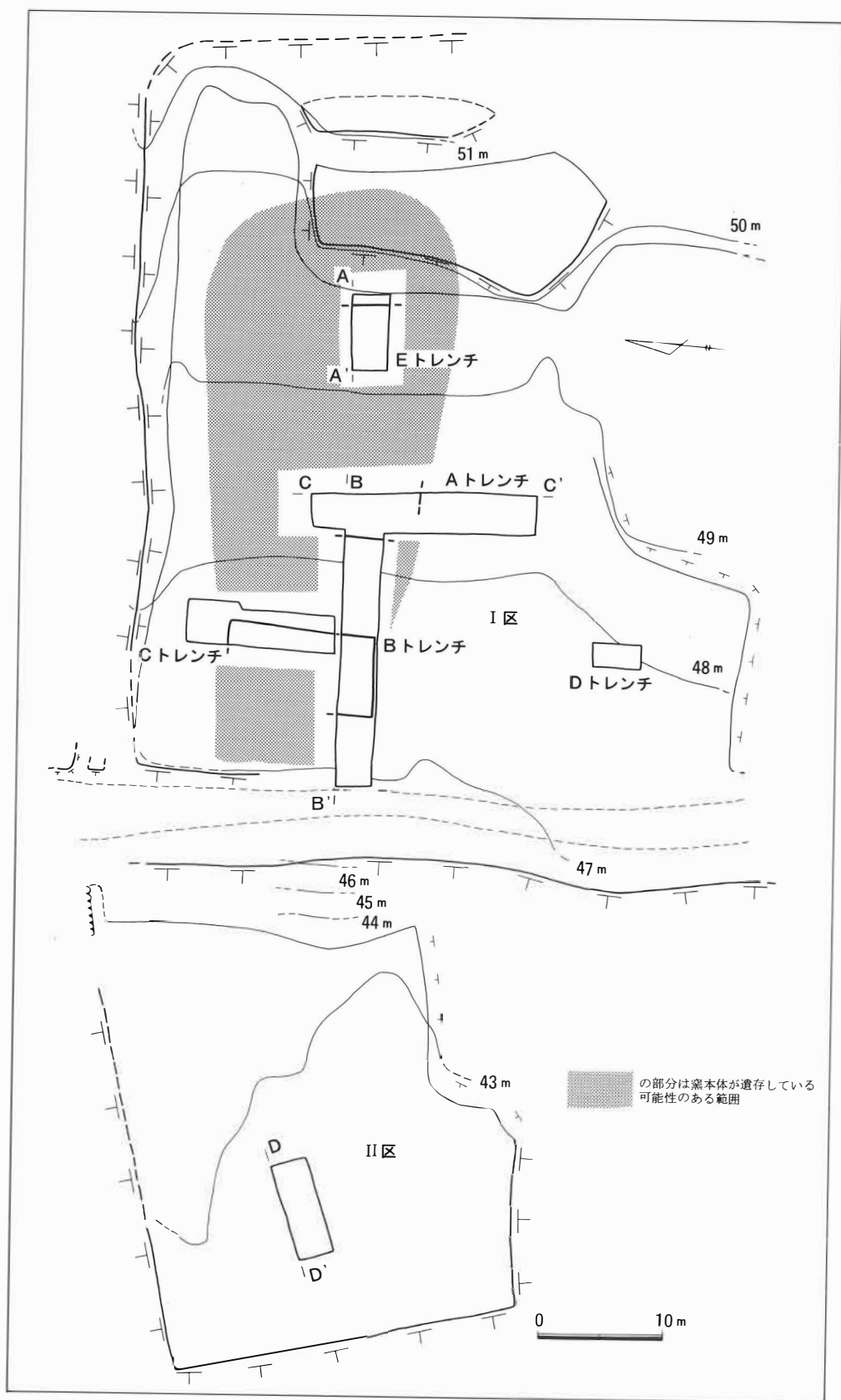


Fig. 2 浜町皿山窯跡地形図 (S=1/250)

### Ⅲ 遺 構

浜町皿山窯跡は丘陵の西面に立地し、以前はみかん畑であったという（P L .1-1）。東から西への緩い傾斜の下端に小道が通り、小道の西側は急傾斜で落ちる。その下は狭い平地になっている。小道の東側の緩傾斜地をⅠ区、小道西側をⅡ区とした。Ⅰ区東側は現在雑木林になっている。Ⅰ区の緩傾斜地中央付近には、トンバリを再利用した段が造られ、周辺には窯道具や陶片が散布していた。草木伐採後、Ⅰ区に5ヶ所、Ⅱ区に1ヶ所のトレンチを設定した（Fig. 2）。

Ⅰ区には南北方向にAトレンチを設定し、Aトレンチに接続して東西方向にBトレンチを、また焼成室の規模確認のため、Bトレンチ北側に南北方向のCトレンチをそれぞれ設定した。Ⅰ区南端に物原探査のためDトレンチをあけたが、表土直下に地山が露出した。また窯尻をとらえるため、Ⅰ区の東端にEトレンチを設定した。以上のトレンチより計5室の焼成室が確認された。

Ⅱ区には、胴木間および物原を探査するためトレンチを1ヶ所設定したが、遺構は検出されなかった。

#### Ⅰ区（Fig. 3・付図、P L .1-2～4-3）

##### A・B・Cトレンチ

Aトレンチ北半部において火床と火床境（火アゼ）の一部を検出した。火床は暗灰色を呈する。火床東側に火床境のトンバリの一部が残存していた（P L .1-3）。火床境の北側には部分的に焼成室の床面が確認されたが、床面の大部分は窯廃絶時のトンバリ抜き取りに伴う破壊により削平されている。Aトレンチ中央部、火床の南端東側にトンバリ抜き取り痕2ヶ所が確認され、窯体側壁と推測される。なおAトレンチ北壁の断面観察より、側壁外側に粘土による裏込めが確認された。窯壁南側に「ㄣ」形の掘り込みと、踏み固められたような固い面が確認され、焚き口および製品出し入れの作業場と推測される（P L .2-3）。作業場の東側では柱穴を検出、柱穴内には木柱の基部が残存していた（P L .3-1）。作業場と柱穴の南側では不定形のピットが検出され、性格は不明だが、窯に伴う遺構と推測される。またピット壁面の観察より、地山上に黄褐色層がのっており、築窯時もしくは窯改修時における整地層と考えられる。Aトレンチ南半部西側および東南隅では掘り込みが検出され、やはり窯に伴う何らかの遺構と思われる（P L .2-1）。西側の掘り込みからは窯道具や染付片などが出土した。

AトレンチとBトレンチとの接続部では地山を整形した段落ちが確認され、その下に焼成室奥壁のトンバリ抜き取り痕が検出された（P L .3-2）。Bトレンチ中央部にも同様の遺構が確認された。焼成室の奥行は3.76m（内法）。この焼成室東側約3/4で砂床が確認され、またトレンチ断面の砂床西端では火床もしくは火床境の痕跡が確認されている。焼成室床面の南西部の一部は防除水路のため溝状に掘削されている。その断面観察により、検出した床面の下にもう一枚焼土面が確認され、少なくとも1回は窯の補修がおこなわれたことがわかる。

Bトレンチ中央およびCトレンチでは、焼成室の奥壁・側壁・火床境のトンバリおよびトンバリ抜き取り痕・火床が検出された（P L .3-3）。焼成室の幅は5.76m、奥行3.08m、火床の奥行は0.86m（以上内法）である。床面の傾きはほぼ水平である。Cトレンチの焼成室の

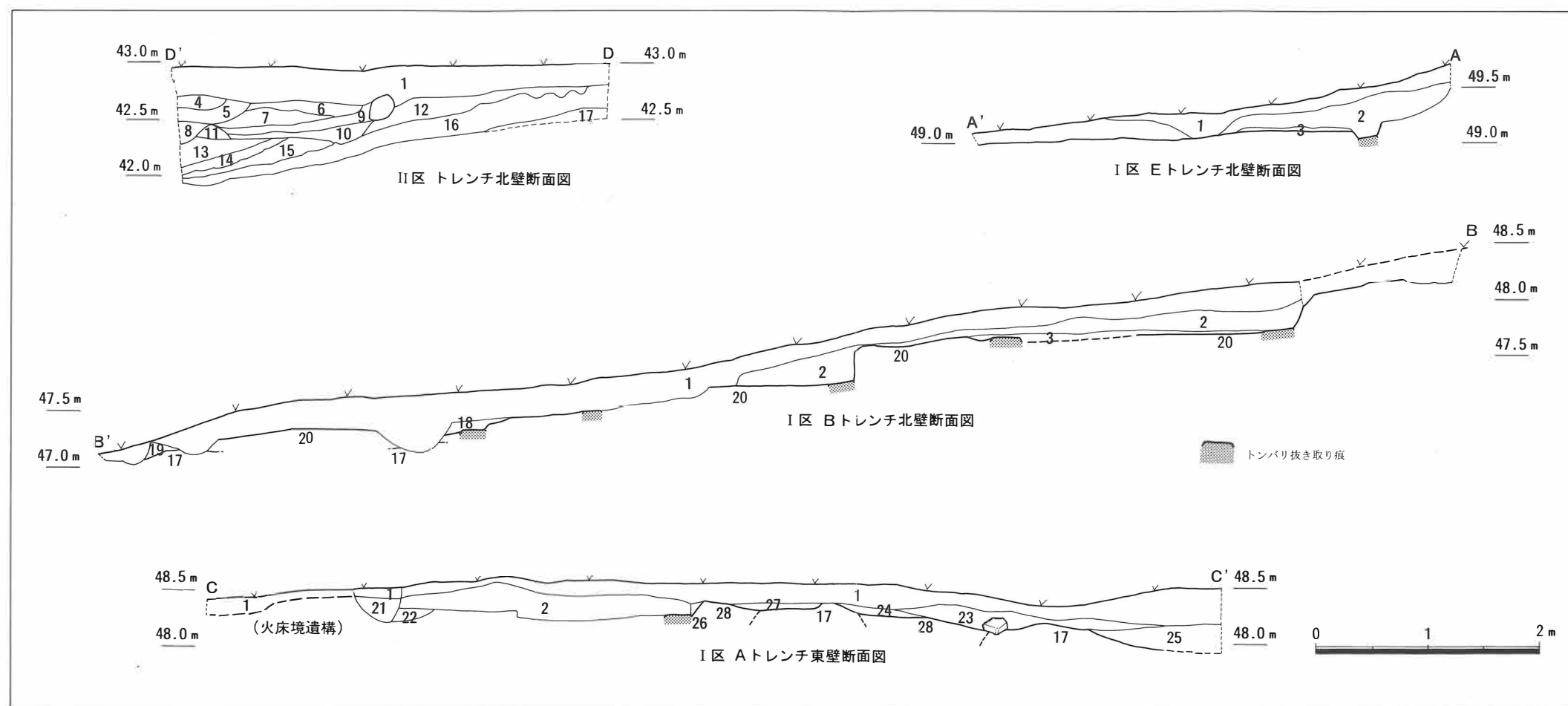


Fig. 3 浜町皿山窯跡 I区Aトレンチ東壁・Bトレンチ北壁・Eトレンチ北壁・II区トレンチ断面図 (S=1/50)

- |                          |                      |
|--------------------------|----------------------|
| 1 茶褐色粘質土(表土)             | 2 赤褐色土(焼土を含む)        |
| 3 暗紫色砂(砂床)               | 4 トンバリ・窯道具を主とした暗褐色土  |
| 5 黄褐色粘質土(焼土・木炭を少量含む)     | 6 褐色粘質土(黄褐色粘土粒を含む)   |
| 7 瓦とトンバリの層               | 8 褐色粘質土(6よりやや暗)      |
| 9 焼けた砂とトンバリ破片層           | 10 褐色土(木炭・貝・陶片を多く含む) |
| 11 褐色粘質土                 | 12 褐色粘質土             |
| 13 黄色粘質土                 | 14 暗褐色土(黄褐色粘質土を含む)   |
| 15 黄褐色粘質土                | 16 暗褐色粘質土(焼土粒を含む)    |
| 17 黄褐色粘質土(地山)            | 18 暗褐色土(焼土粒を多く含む)    |
| 19 黄褐色粘質土(焼土を含む)         | 20 レンガ色に焼けた砂質層(床面)   |
| 21 褐色砂質土(攪乱)             | 22 赤褐色砂(攪乱)          |
| 23 褐色粘質土(焼土粒を含む)         | 24 黒褐色シルト質土(焼土粒を含む)  |
| 25 暗褐色粘質土(焼土粒を含む・掘り込み埋土) | 26 焼土(窯壁裏込め)         |
| 27 黄褐色粘質土(整地層か)          | 28 黄褐色粘質土(整地層)       |



砂床はほぼ全面に残存していた。残っていたトンバリは調査区全体でも10個足らずで、トンバリの抜き取りはかなり徹底している。後世の攪乱というより、窯廃絶時に、新しい窯に再利用するため抜き取られたと推測される。またBトレンチで検出された側壁に比べ、Aトレンチのそれがやや南にずれることから、窯体は窯尻方向に向けて幅広に開いていたと考えられる。

Bトレンチ西部でも焼成室奥壁の段落ち・トンバリ抜き取り痕および焼土面が確認されたが、焼成室東部に円形の攪乱坑があり、また西端はすでに削平されているため、焼成室の規模は不明である（P L .4-1）。円形攪乱坑の壁面観察でも、床面下に焼土面一枚が確認された。

#### Eトレンチ（P L .4-2・3）

Eトレンチでも焼成室が検出され、奥壁のトンバリ抜き取り痕と、床面の約1/2に残存していた砂床が確認された。Eトレンチ東壁にも焼土層が見られることから、少なくとももう1室焼成室があり、窯尻は現在の雑木林の下と推測される。

### Ⅱ区（Fig.3）

I区とⅡ区の境の急斜面上に窯道具などが散布していたことから、Ⅱ区にも窯体が延びる可能性が考えられ、胴木間と物原探査のためトレンチを設定したが、窯道具・磁器片が流れ込んだ層が確認されたものの、窯体は検出されなかった。念のため急斜面部を精査したが、窯体は確認されず、Ⅱ区の平地造成時に窯体は完全に削平されたと考えられる。

## IV 遺 物

浜町皿山窯跡出土品は染付、釉下彩などの陶磁器と窯道具に大別される。

陶磁器の種類は碗・皿が主である。窯道具はハマ・足付ハマ・トチン・シノが多く、サヤはほとんどみられない。

### 1. 陶磁器

#### 〈I区〉

##### A トレンチ

Fig. 4-1は染付筒形碗。外面を区画し、一方に菊花散し文を描く。1780~1810年代。

Fig. 4-2~5は型紙摺による染付碗。2は碗の蓋であり、外面は捻花状に区画し、草花と青海波地文で埋め、見込に環状の松竹梅、口縁部に輪宝文を表す。3は外面に岩牡丹文を配し、見込は蛇ノ目状に釉剥ぎするが、そこに重ね焼きした製品の高台の熔着痕がみられる。4は外面を三方に区画割したなかに草花を描く。見込は蛇ノ目状に釉剥ぎする。5は外面に草木と思われる文様を描き、見込にも文様を染付するが、他の型紙摺による碗か皿の破片が熔着して不明瞭である。年代はすべて明治~大正。

Fig. 4-6は型紙摺による染付皿。見込は蛇ノ目釉剥ぎであるが、内面全体に藤や草花を描く。明治~大正。

Fig. 4-7・8は型紙摺による染付皿。7は見込中央に環状の松竹梅、側面に松皮菱形窓内に草花、丸窓内に「草木青々」の文字を配す。外側面に唐草文。型打成形によって輪花に作り、底部は蛇ノ目凹形高台に作る。見込に足付ハマ熔着痕が3個残る。8は見込に蝶、側面に草花などを描き、見込を蛇ノ目状に釉剥ぎする。底部を蛇ノ目凹形高台に作る。明治~大正。

Fig. 4-9は白磁の鉢。朝鮮向けに作られたものであろう。高台内に「安武」の文字が桜花の中に染付で表されている。ゴム印であろうか。大正~戦前。

Fig. 4-10は染付の火入。内面と高台内は無釉。明治~大正。

##### B トレンチ

Fig. 4-11は染付の碗の底部片。18世紀末~幕末。

Fig. 4-12は白磁猪口の口縁部片。明治~大正。

Fig. 4-13は型紙摺による釉下彩鉢。外面に青色と緑色顔料で「寿」字を表わし、腰部に青色顔料で蓮弁文をめぐらす。見込は蛇ノ目釉剥ぎとみられる。明治~大正。

Fig. 4-14は白磁の碁子。

以上のうち、検出された窯の製品の可能性が強いのはFig. 4-13だけである。

##### C トレンチ

Fig. 4-15は染付端反形碗の蓋。口縁部内側に雷文帯を描く。1820~60年代。

Fig. 4-16は染付皿。見込に山水文を描く。明治~大正。

以上2点は検出された窯の製品かどうか明らかでない。

## 〈Ⅱ区〉

Fig. 4-17は染付筒形碗の底部。見込にコンニャク印判による五弁花文、高台脇に折松葉文を染付する。1780～1800年代。

Fig. 4-18は染付碗。見込に寿字かと思われる崩れた文字を染付する。18世紀末～19世紀前半。

Fig. 4-19は白磁の筒形碗であり、胴部に銹釉の帯をめぐらし口縁部にも銹釉を塗る。その上下には沈線を数条引いている。18世紀後半。

Fig. 4-20は染付の碗であり、外面に染付文様がある。18世紀とみられるが、細片のため詳細は不明であり、本窯の製品かどうか不明でない。

Fig. 4-21・22、Fig. 5-23は型紙摺による染付碗。21・22は見込に環状の松竹梅文、口縁部に輪宝文を配す。21は外面に源氏香に葵の文様を表し、22は岩に竹と草花文、23は花唐草地文の区画で三方割し、藤を描く。22は窯詰め時に三足付ハマを使い、その熔着痕が見込に残る。23は見込を蛇ノ目釉剥ぎしており、直接重ね積みしたものであろう。いずれも明治～大正。

Fig. 5-24は白磁の小碗であり湯飲用とみられる。19世紀後半と推測される。

Fig. 5-25～29は型紙摺による染付の深めの碗。湯飲用である。いずれも口縁部内側に輪宝文、高台脇に蓮弁文を表す。25・26は外面に岩に竹雀・菊文、27は外面に花詰地文と窓絵に梅樹文を描く。28は呉須がにじんで文様が不鮮明であるが、27と同じか近い文様と思われる。29は外面に岩に松や草花を表わす。いずれも明治～大正。

Fig. 5-30・31は型紙摺による染付皿。見込に松竹梅、見込周辺に波涛文から変化した文様帯をめぐらす。口縁部は型打成形によって輪花形に作る。30の内側面は青海波地に熨斗文、31は窓内に竹・菊などを描き込み、地に青海波と草花を表す。30の外側面は仏手柑文、31は草花を描く。両者とも蛇ノ目凹形高台に作り、30は見込に4足付ハマの熔着痕がみられる。両者とも明治～大正。

Fig. 5-32は型紙摺による染付鉢。外面に龍文、高台内に「安武造品」の2行4字銘が表されている。内面には焼成時に他の型紙摺による碗が落ち込んで熔着している。この碗はFig. 5-50と同類である。明治～大正。

Fig. 5-33は型紙摺による小碗。口縁部内側に輪宝文、外側に花唐草文を型紙摺で表し、主文に橘とみる（海松）文などを配す。明治～大正。

Fig. 5-34は白磁碗。明治～大正。

Fig. 5-35は型紙摺による釉下彩鉢。外面主文は「寿」字と思われる文様を緑色顔料で表わし、高台脇に蓮弁文、高台内に「大日本安武製」の2行6字銘を青色顔料で表す。

Fig. 5-36・37は釉下彩の小碗。36は外面に草花文を、青色・ピンク色（正円子）・黒線で描く。37はみる文を青色・緑色で銅版転写によって表わす。両者とも明治後半～大正。

Fig. 5-38は染付碗の蓋。外面に桐唐草文を銅版転写で表す。明治後半～大正。

Fig. 5-39は染付小坏。外面に染付による圈線を口縁部と高台脇付近に引く。大正～戦前。

Fig. 5-40は陶器の挿鉢であり、本窯の製品ではないと思われる。陶業関係者の生活の中に用いられたものであろう。

## 〈遺跡採集品〉

Fig. 5-41～46は型紙摺による染付碗。いずれも見込に環状の松竹梅、口縁部内側に輪宝

文を配す。また41～43と46は見込に足付ハマ熔着痕がある。外面の主文は、41は竹雀や菊蝶に丸窓内に青海波地文、42は竹菊に亀甲つなぎ文。43は松皮菱割に花文を埋め、竹雀に菊などを描く。44は41と同様の文様。45は葵や花菱つなぎ文を配す。46は葵に源氏香文を描く。いずれも明治～大正。

Fig. 5-47・48は型紙摺による染付碗であり、見込を蛇ノ目状に釉剥ぎしている。47は口縁部内側に輪宝文、外面に岩竹・菊を表し、地文に花文を配す。48は外面花唐草の区画で三方割し、藤を配す。両者とも明治～大正。

Fig. 5-49は型紙摺による染付碗の蓋。口縁部内側に輪宝文、外面に窓絵や花文などを表す。明治～大正。

Fig. 5-50は型紙摺による染付碗。口縁部内側に輪宝文、外面にFig. 5-49と類似の文様を表す。明治～大正。

Fig. 5-51は型紙摺による湯飲用の染付碗。口縁部内側に輪宝文、外面に窓内にザクロ、地文として青海波や花を表す。腰部には蓮弁文を配す。明治～大正。

Fig. 5-52・53、Fig. 6-54・55は型紙摺による染付皿であり、見込に環状の松竹梅文、その周囲に波濤文を表す。底部は蛇ノ目凹形高台である。いずれも型打成形で輪花に作る。52～54は窓絵内に草花や藤・竹などを配し、地は花などで埋める。外側面に草花やザクロ文を表す。52は見込に4足付ハマ、53は3足付ハマ熔着痕が残る。54は見込に4足付ハマが熔着している。55は内側面を6つに区画し、唐子や蝶を表す。いずれも明治～大正。

Fig. 6-56・57も型紙摺による皿であり、底部は蛇ノ目凹形高台に作る。側面は型打成形により輪花に表す。56は見込に藤、側面の丸窓内に蝶などを配し、地に青海波に梅花を散らす。外側面は手描きにより唐草文を描く。57は内面に3つの菱形窓内にブドウ文を表し、地には葵や花で埋める。外側面には七宝文を配す。見込に3足付ハマの熔着痕が残る。両者とも明治～大正。

Fig. 6-58は型紙摺による皿。側面に菊の折枝文を3方に配し、見込は蛇ノ目釉剥ぎしている。明治～大正。

Fig. 6-59・60は型紙摺による鉢。両者とも外側面に唐花であろうか丸い単位の文様を配す。59の高台内には不明の銘を表す。60の高台内には「口深珍蔵」とみられる4字銘が染付される。中国・清朝磁器に「若深珍蔵」の銘が知られるから、そうした清朝磁器に倣ったものと思われる。両者とも明治～大正。

Fig. 6-61は薬盒の蓋であり、型紙摺によって「肥前鹿嶋五蔵圓」の文字を表している。「五蔵圓」とは「江戸時代、江戸両国米沢町の大木伝四郎店から売り出された練り薬」（小学館『日本国語大辞典』）とあり、練り薬を入れる容器として作られたものであろう。明治～大正。

Fig. 6-62・63は銅版転写による碗。62は蓋であり牡丹に蝶かと思われる文様を表し、63は扇散し文を描く。両者とも明治～大正。

Fig. 6-64は松に唐草文を描いた碗。松はゴム印とみられ、本窯の製品の可能性は少ない。昭和～戦前。

Fig. 6-65は釉下彩の碗であり、外面に青・ピンク・黒線で草木を表し、高台内に「山本氏」の文字を黒線で入れる。これも本窯の製品かどうか不明。明治後半～大正。

Fig. 6-66は釉下彩碗であり、高台内に「肥70」の銘があり、太平洋戦争中に統制された時期の製品であることがわかる。よって本窯の焼造品ではないとみられる。

Fig. 6-67は色絵碗の蓋であり、これも本窯の製品かどうか不明。明治～大正。

文を配す。また41～43と46は見込に足付ハマ熔着痕がある。外面の主文は、41は竹雀や菊蝶に丸窓内に青海波地文、42は竹菊に亀甲つなぎ文。43は松皮菱割に花文を埋め、竹雀に菊などを描く。44は41と同様の文様。45は葵や花菱つなぎ文を配す。46は葵に源氏香文を描く。いずれも明治～大正。

Fig. 5-47・48は型紙摺による染付碗であり、見込を蛇ノ目状に釉剥ぎしている。47は口縁部内側に輪宝文、外面に岩竹・菊を表し、地文に花文を配す。48は外面花唐草の区画で三方割し、藤を配す。両者とも明治～大正。

Fig. 5-49は型紙摺による染付碗の蓋。口縁部内側に輪宝文、外面に窓絵や花文などを表す。明治～大正。

Fig. 5-50は型紙摺による染付碗。口縁部内側に輪宝文、外面にFig. 5-49と類似の文様を表す。明治～大正。

Fig. 5-51は型紙摺による湯飲用の染付碗。口縁部内側に輪宝文、外面に窓内にザクロ、地文として青海波や花を表す。腰部には蓮弁文を配す。明治～大正。

Fig. 5-52・53、Fig. 6-54・55は型紙摺による染付皿であり、見込に環状の松竹梅文、その周囲に波涛文を表す。底部は蛇ノ目凹形高台である。いずれも型打成形で輪花に作る。52～54は窓絵内に草花や藤・竹などを配し、地は花などで埋める。外側面に草花やザクロ文を表す。52は見込に4足付ハマ、53は3足付ハマ熔着痕が残る。54は見込に4足付ハマが熔着している。55は内側面を6つに区画し、唐子や蝶を表す。いずれも明治～大正。

Fig. 6-56・57も型紙摺による皿であり、底部は蛇ノ目凹形高台に作る。側面は型打成形により輪花に表す。56は見込に藤、側面の丸窓内に蝶などを配し、地に青海波に梅花を散らす。外側面は手描きにより唐草文を描く。57は内面に3つの菱形窓内にブドウ文を表し、地には葵や花で埋める。外側面には七宝文を配す。見込に3足付ハマの熔着痕が残る。両者とも明治～大正。

Fig. 6-58は型紙摺による皿。側面に菊の折枝文を3方に配し、見込は蛇ノ目釉剥ぎしている。明治～大正。

Fig. 6-59・60は型紙摺による鉢。両者とも外側面に唐花であろうか丸い単位の文様を配す。59の高台内には不明の銘を表す。60の高台内には「口深珍蔵」とみられる4字銘が染付される。中国・清朝磁器に「若深珍蔵」の銘が知られるから、そうした清朝磁器に倣ったものと思われる。両者とも明治～大正。

Fig. 6-61は薬盒の蓋であり、型紙摺によって「肥前鹿嶋五蔵圓」の文字を表している。「五蔵圓」とは「江戸時代、江戸両国米沢町の大木伝四郎店から売り出された練り薬」（小学館『日本国語大辞典』）とあり、練り薬を入れる容器として作られたものであろう。明治～大正。

Fig. 6-62・63は銅版転写による碗。62は蓋であり牡丹に蝶かと思われる文様を表し、63は扇散し文を描く。両者とも明治～大正。

Fig. 6-64は松に唐草文を描いた碗。松はゴム印とみられ、本窯の製品の可能性は少ない。昭和～戦前。

Fig. 6-65は釉下彩の碗であり、外面に青・ピンク・黒線で草木を表し、高台内に「山本氏」の文字を黒線で入れる。これも本窯の製品かどうか不明。明治後半～大正。

Fig. 6-66は釉下彩碗であり、高台内に「肥70」の銘があり、太平洋戦争中に統制された時期の製品であることがわかる。よって本窯の焼造品ではないとみられる。

Fig. 6-67は色絵碗の蓋であり、これも本窯の製品かどうか不明。明治～大正。

### 〈窯跡周辺採集品〉

Fig. 6-68・69は歓喜神社辺で採集されたもの。

Fig. 6-68は白磁鉢であり、高台内に「大日本安武製」の文字が型紙摺で染付される。明治～大正。

Fig. 6-69は白磁の猪口。

Fig. 6-70は69と同様の白磁猪口であり、窯跡北側で採集されたもの。

## 2. 窯道具

### 〈Ⅰ区〉

Aトレンチ、Bトレンチ、Cトレンチで出土した窯道具のなかから、種類をすべて紹介できるように選んで図化した。ハマ・シノ（ナンキン）・トチン・大型ハマ・サヤなどがあるが、ハマ・シノが量的に多い。サヤはわずかにみられる程度である。

ハマには逆蓋形のもの（Fig. 7-1～6・24～31、Fig. 8-48）、薄い円板状のもの（Fig. 7-7～9・32）、足付ハマ（Fig. 7-10～14）がある。逆蓋形ハマには陶製のもの（Fig. 7-1・2・5・6・28～31、Fig. 8-48）と磁製のもの（Fig. 7-3・4・24～27）があり、底部を削り込んだもの（Fig. 7-1～4・24～27）と、底部を糸切放しのもの（Fig. 7-5・6・28・29）がある。底部を糸切放しのものはすべて陶製であった。薄い円板状ハマはすべて磁製である。足付ハマには3足付ハマ（Fig. 7-10～13）と4足付ハマ（Fig. 7-14）があり、12・13の底部中央には型に刻まれたマークが陽刻される。足付ハマは全て磁製であり、土型に押し込んで作る。

シノには小さい鼓形のもの（Fig. 7-15・16）と、台部を高く作るもの（Fig. 7-17～20・33～36）がある。底部は削り込んでいる。皿部を作り出さない形のもの（Fig. 7-37～41）もある。シノは全て陶製である。

トチンはI字形に作られたものであり、大小のサイズがみられる（Fig. 7-21・42～45）。トチンはやや粗い耐火粘土を用いて作られている。

この他、大型ハマ（Fig. 7-22）や板状に作られた用途不明のものがある（Fig. 7-23）。これらも粗い耐火粘土を用いている。

サヤは型作りのFig. 7-47がみられる。口縁部を欠失して全体の形はわからないが、磁製の円板状ハマが内底に熔着している。サヤも粗い耐火粘土を用いている。

### 〈Ⅱ区〉

ハマ・シノ・大型シノ・大型ハマなど、Ⅰ区であまりみられなかったものを主として選んで図化した。

ハマは逆蓋形で磁製のもの（Fig. 8-49）、薄い円板状で磁製のもの（Fig. 8-50～52）、磁製の足付ハマ（Fig. 8-53～56）、大型の陶製円板形ハマ（Fig. 8-57）がある。足付ハマには3足付ハマ（Fig. 8-53・54・56）と4足付ハマ（Fig. 8-55）があり、54～56の底部中央には型に刻まれたマークが陽刻され、55は丸に「玉」字を表している。56のマークは「卍」である。56は足が2個欠失し、53は足3つが全て欠失している。

シノは台部を高く作るもの（Fig. 8-58）で陶製であり、他に大型のシノ（Fig. 8-59）がある。この大型シノには外側面に窯印とみられる押印がみられ耐火粘土によって作られている。卍に「十」字の印であり、同様の印は前述の足付ハマのFig. 8-56や後述の大型ハマ

のFig. 8-60にもみられ、また前述の足付ハマのFig. 7-12・13、Fig. 8-54も「十」字にみえるので、同じ窯焼の所有印と推測される。

大型ハマはFig. 8-60~62のように逆蓋形を大きくした形であり、底部を削り込む。外側面に押印を施している。卍の他に、「惣」、「分」がみられる。いずれも耐火粘土によって作られる。

#### 〈窯跡採集品〉

発掘出土品にみられなかった種類を採集品のなかから選んだ。

Fig. 8-63・64は磁製の足付ハマであり、底部の押印が出土品のそれとは異なる。63の押印は「卍」であり、64の押印は金とみられる。

Fig. 8-65は陶製の型作りのサヤ。口部に上のサヤの熔着痕、底部に下のサヤの口部の熔着痕と磁器製品の口縁部の熔着痕がみられるから、同様のサヤを重ね積みして用いたことがわかる。

### 3. 金属製品

寛永通宝1枚がⅡ区のFig. 3の10の層から出土した (Fig. 8-66)。

注 童依華『中国歴代陶瓷款識彙集』台北、1984の66頁。

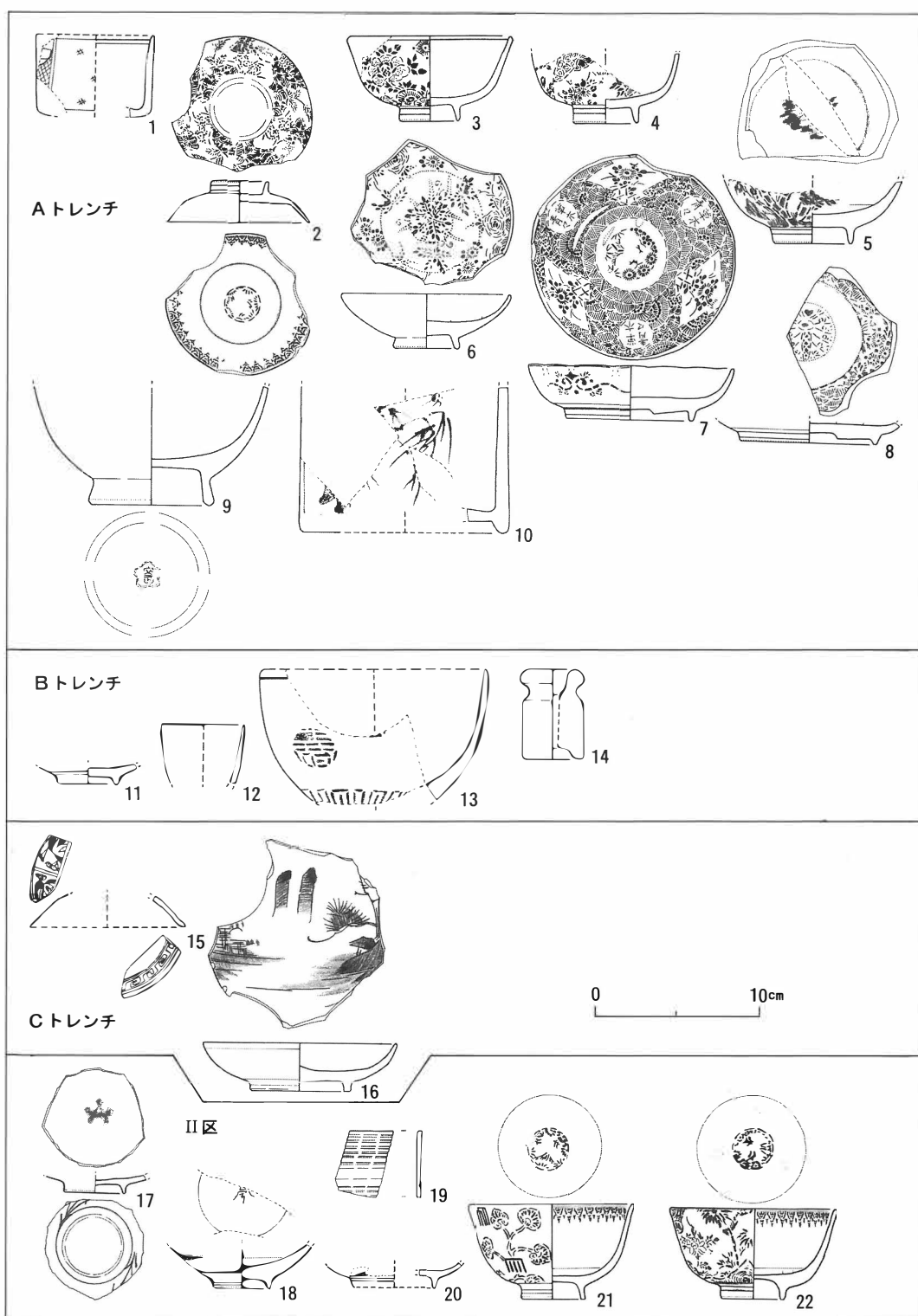


Fig. 4 浜町皿山窯跡出土遺物(1)



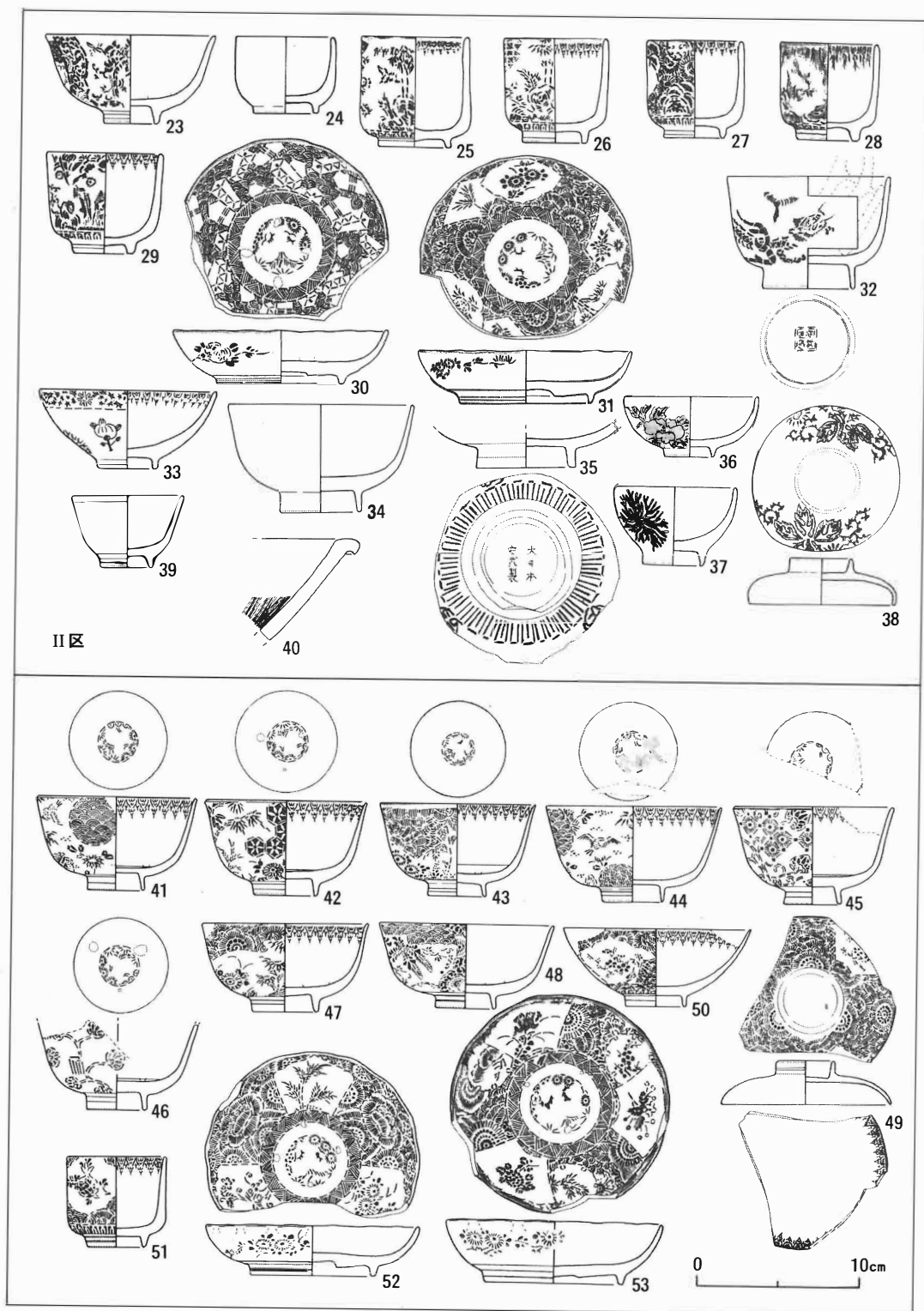


Fig. 5 浜町皿山窯跡出土遺物(2)

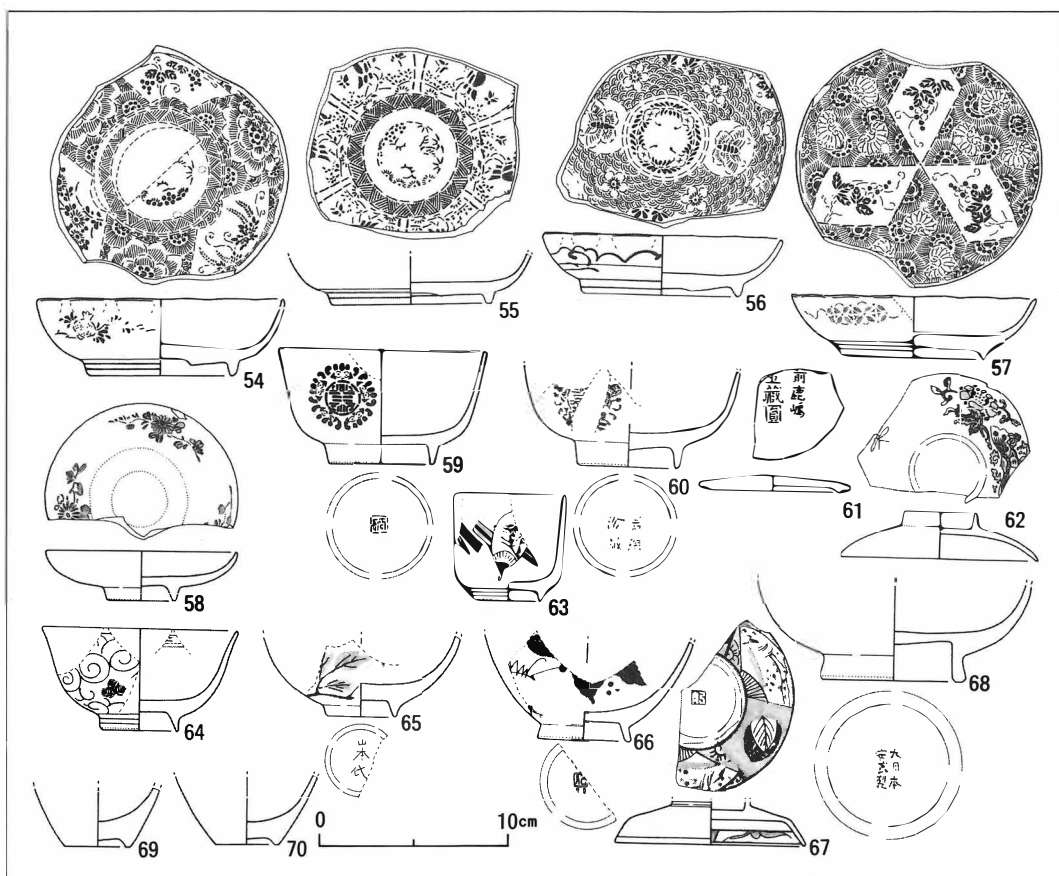


Fig. 6 浜町皿山窯跡出土遺物(3)

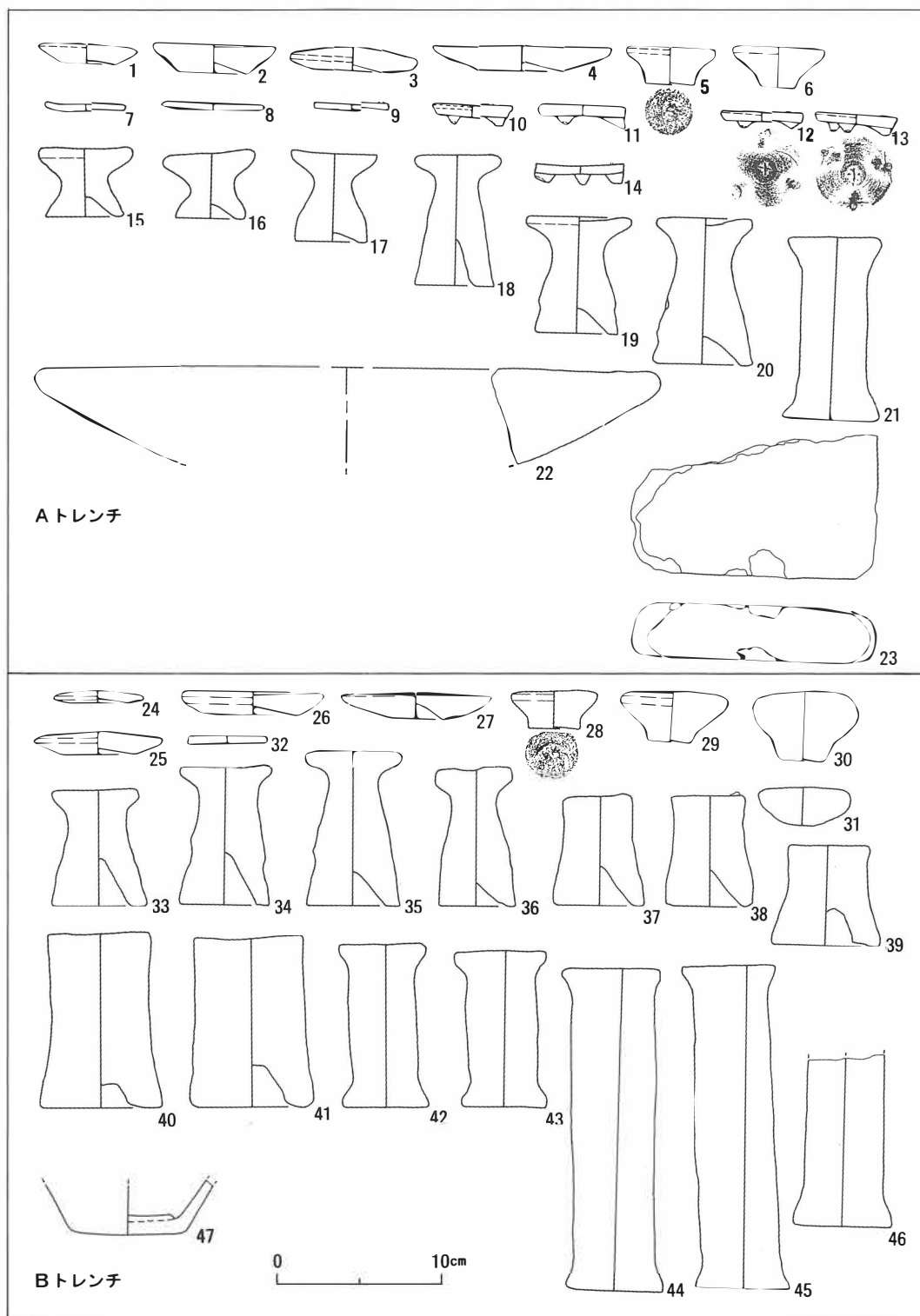


Fig. 7 浜町皿山窯跡出土遺物(4)

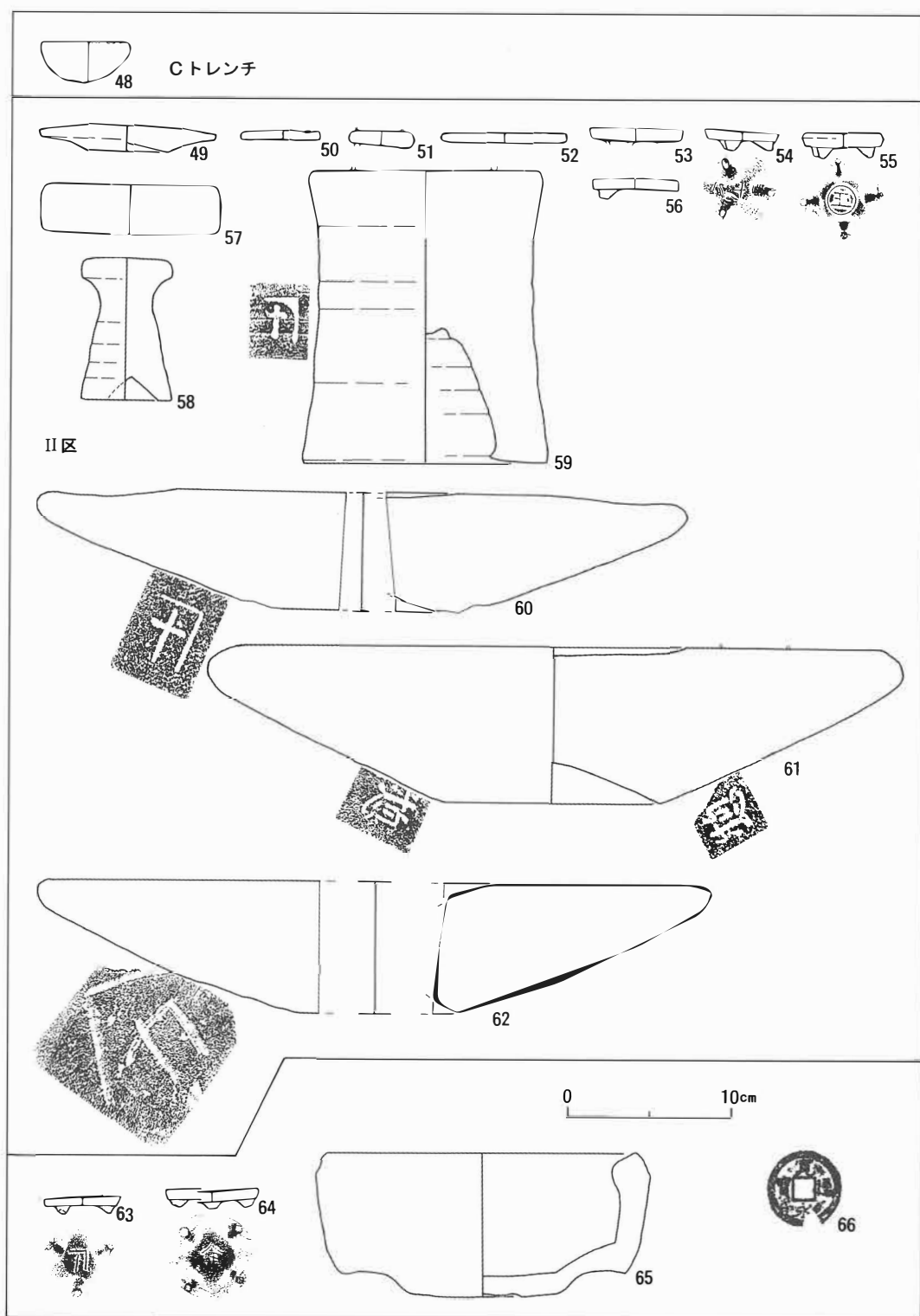


Fig. 8 浜町皿山窯跡出土遺物(5)

注 66のみ縮尺が $\frac{1}{2}$

## ま と め

浜町皿山窯跡は複数基の窯から成っているが、今回の調査は窯場の初期の窯体を確認することを目的とした。

窯場としての終末期には調査地点の谷を挟んで反対側の斜面に窯を設けていたが、この窯は明治9年(1876)の地図に窯跡と判る地割りがみられるから、このころ浜町皿山窯が操業しているとすればこの地点だけで焼造していたものと推測される。Ⅱ章で述べているように、廃窯は昭和16年(1921)である。このように明治9年から昭和16年の廃窯までの間の浜町皿山の窯についてはその位置もほぼ明かといえるが、それ以前の、とくに有田の『皿山代官旧記覚書』の記録にみえる安永5年(1776)前後の窯や、「鹿島藩日記」にみえる享保3年(1718)や享保6年(1721)ごろの窯などの位置については不明であった。

現地表での遺物散布の状況を調べても、こうした江戸時代の陶片・窯道具が多くみられる地点はなかった。それでも調査地点の南側にある歓喜神社からその北へ続く丘陵西斜面にいくらか江戸後期ごろの陶片の散布がみられた。それは点在する程度であり、窯に伴う窯壁片や焼土・窯道具がはっきり確認できる地点は調査地点以外になかった。そこで窯の存在の確実性の高いこの地点を調査対象に選んだ。

調査の結果はⅢ章のとおりであるが、窯体は1基分が検出された。5つの焼成室が確認され、1室の規模は奥行3.08m、幅5.76mである。地形からみて確認された焼成室5室は窯体の上方部分とみられ、下方部分はⅡ区の平地を造成する際に、削平され消滅したものと推測される。窯尻は今回の調査範囲では確認できなかったが、地形からみるとそれほど上方にのびることはないと思われる。

窯壁は奥壁、側壁ともトンバリを用いており、窯体は最低1回は改修されたことも確認された。

製品は主に型紙摺による染付碗であり、他に型紙摺による皿が多い。これらの年代は明治から大正にかけてのものと推測されるが、それより古いとみられるものも少量出土している。18世紀末ごろの筒形の湯飲用碗や飯用の碗である。また明治～大正ごろのものとして、釉下彩の碗や小坏がある。銅版転写の碗も少量みられる。型紙摺の製品の中には朝鮮向けの鉢とみられるものがある。高台内に「安武造品」とか「大日本安武製」、「安武」などの銘が染付されている。「安武」は『明治十三年ヨリ同十六年迄、勸業課商工務掛事務簿』の窯主4人のうちの1人に「安武峯太郎」の名があり、「安武」銘はこの安武氏の製品を示すものと推測される。

窯道具はハマ・足付ハマ・薄い円板状ハマ・トチン・シノが多く、それに天秤積みに用いたと思われる大型ハマ・大型トチンなどが出土した。サヤはほとんど出土していないが、このことは製品内容とともに日用雑器生産の窯であったことを物語る。足付ハマは1780年代ごろから磁器に用いられるようになる。ところが、1780年代から幕末ごろの西有田町の広瀬向窯出土の足付ハマなどをみると、円板の部分は耐火粘土を用い足の部分だけを磁土を使っている。浜町皿山窯の足付ハマは全て磁土だけで作ったものであり、広瀬向窯の足付ハマと異なる。このことが年代差なのか、それとも窯の違いによるものなのかはもう少し他の窯の出土例を待って考える必要がある。

以上の出土品や記録から、本窯の操業年代は18世紀末ごろから明治あるいは大正ごろにかけてと推測されるが、検出された窯体はむしろ江戸時代というよりも明治・大正ごろの可能性が強い。

将来、この周辺で記録にあるような18世紀代の窯体が発見される可能性は残る。鹿島藩領内の窯として、記録も比較的残る浜町皿山窯の歴史を解明する作業が今後とも進められることに期待したい。

## 佐賀県立九州陶磁文化館 発掘調査窯跡 一覧

No.	窯跡名	所 在 地	発掘年度	文献
1	窯ノ辻窯	杵島郡山内町大字宮野24480-1	昭和58年度	1
2	ダンバギリ窯	杵島郡山内町大字宮野24375・24485	昭和58年度	1
3	長吉谷窯	西松浦郡有田町岩開	昭和58年度	1
4	百間窯	杵島郡山内町大字宮野字板ノ川内	昭和59年度	2
5	樋口窯	西松浦郡有田町字幕の頭	昭和59年度	2
6	南川原窯ノ辻窯	西松浦郡有田町西部字窯ノ辻	昭和60年度	3
7	広瀬向窯	西松浦郡有田町大字大木字黒岩	昭和60年度	3
8	楠木谷窯	西松浦郡有田町泉山	昭和61年度	4
9	小溝上窯	西松浦郡有田町西部字上迎ノ原	昭和61年度	4
10	下白川窯	西松浦郡有田町白川	昭和62年度	5
11	年木谷1号窯	西松浦郡有田町泉山	昭和62年度	5
12	吉田2号窯	藤津郡嬉野町大字吉田字大黒所	昭和63年度	6
13	吉田1号窯	藤津郡嬉野町大字吉田字大黒所	平成元年度	7
14	志田西山1号窯	藤津郡塩田町大字久間	平成2年度	8
15	小森窯	西松浦郡西有田町大字大木	平成3年度	9
16	浜町皿山窯	鹿島市浜町甲1066-1・1064・1018	平成4年度	本書

## 文 献

- 1 『窯ノ辻・ダンバギリ・長吉谷一肥前地区古窯跡調査報告書一』1984年3月31日
- 2 『百間窯・樋口窯一肥前地区古窯跡調査報告書 第2集一』1985年3月31日
- 3 『南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯一肥前地区古窯跡調査報告書 第3集一』1986年3月31日
- 4 『楠木谷窯・小溝上窯一肥前地区古窯跡調査報告書 第4集一』1987年3月31日
- 5 『下白川窯・年木谷1号窯一肥前地区古窯跡調査報告書 第5集一』1988年3月31日
- 6 『嬉野町吉田2号窯一肥前地区古窯跡調査報告書 第6集一』1989年3月31日
- 7 『嬉野町吉田1号窯一肥前地区古窯跡調査報告書 第7集一』1990年3月31日
- 8 『塩田町志田西山1号窯跡一肥前地区古窯跡調査報告書 第8集一』1991年3月30日
- 9 『西有田町小森窯跡一肥前地区古窯跡調査報告書 第9集一』1992年3月31日

# PLATES





1. 浜町皿山窯跡遠望
2. 浜町皿山窯跡  
I区全景
3. 浜町皿山窯跡  
I区Aトレンチ  
火床境遺構  
(西から)



1. 浜町皿山窯跡  
I区Aトレンチ全景  
(南から)
2. 浜町皿山窯跡  
I区Bトレンチ全景  
(西から)
3. 浜町皿山窯跡  
I区Aトレンチ  
作業場遺構  
(東から)

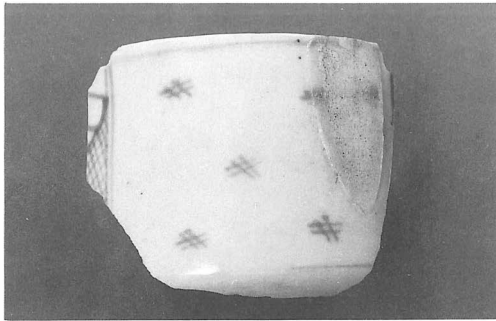


1. 浜町皿山窯跡  
I区Aトレンチ  
柱穴遺構
2. 浜町皿山窯跡  
I区A・Bトレンチ接続部  
奥壁トンバリ抜き取り痕  
(北から)
3. 浜町皿山窯跡  
I区Bトレンチ中央部・  
Cトレンチ全景  
(南から)



1. 浜町皿山窯跡  
I区Bトレンチ中央部  
火床遺構  
(西から)
2. 浜町皿山窯跡  
I区Eトレンチ全景  
(西から)
3. 浜町皿山窯跡  
I区Eトレンチ  
奥壁トンバリ抜き取り痕  
(南から)

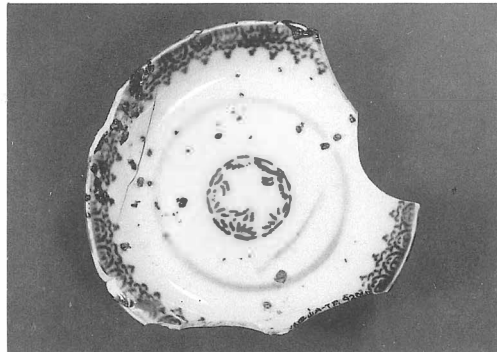




1. 染付碗  
(I区Aトレンチ出土)



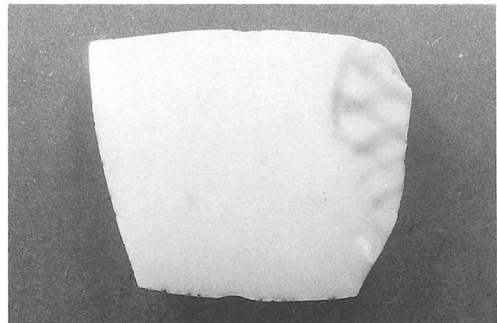
3. 染付型紙摺皿  
(I区Aトレンチ出土)



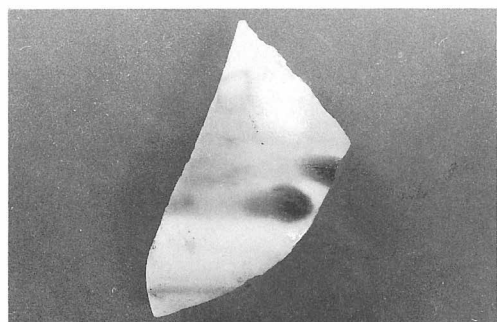
2. 染付型紙摺碗の蓋  
(I区Aトレンチ出土)



4. 染付型紙摺皿  
(I区Aトレンチ出土)



5. 染付碗  
(I区Bトレンチ出土)



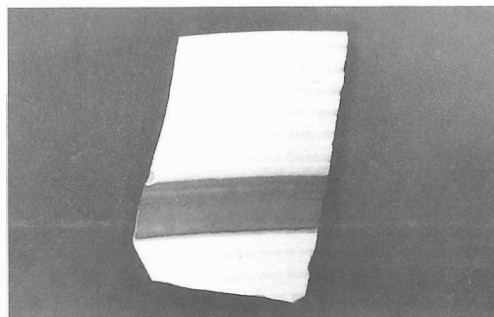
6. 染付碗  
(I区Cトレンチ出土)



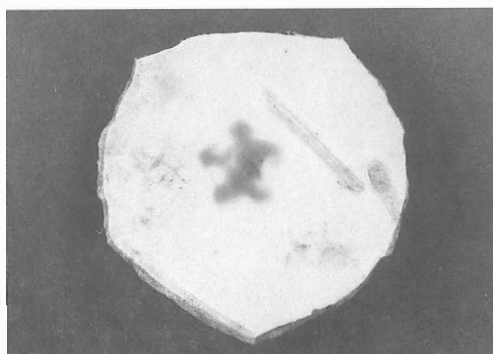
7. 染付碗の蓋  
(I区Cトレンチ出土)



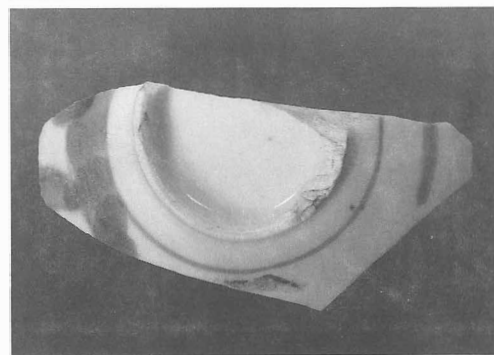
8. 染付碗  
(II区出土)



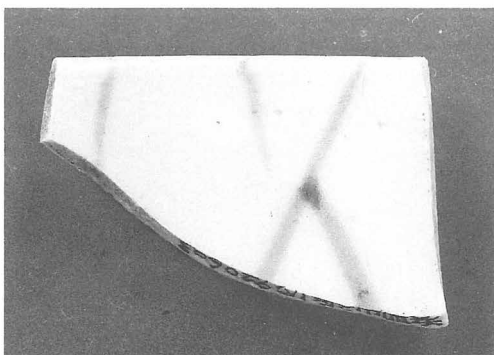
9. 白磁に銹釉帯文碗  
(II区出土)



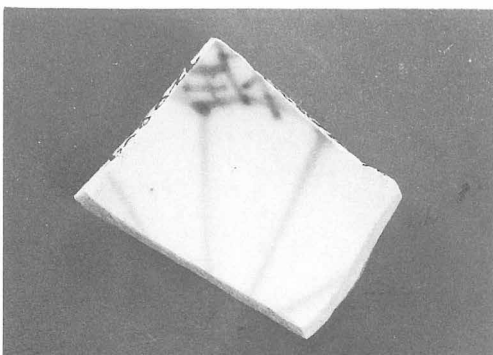
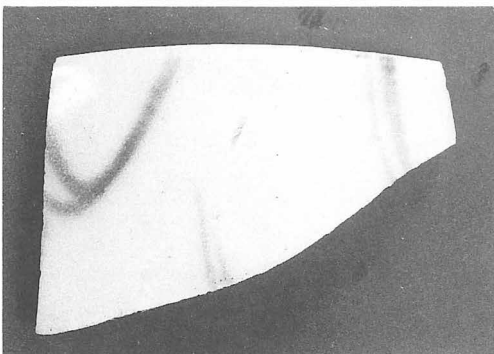
10. 染付碗  
(II区出土)



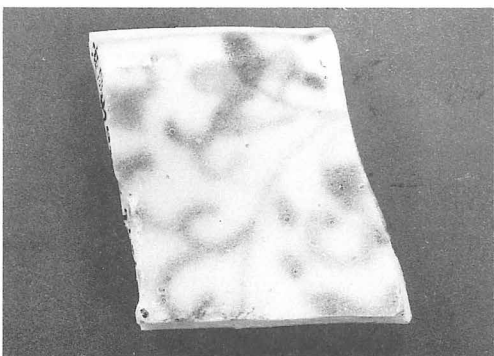
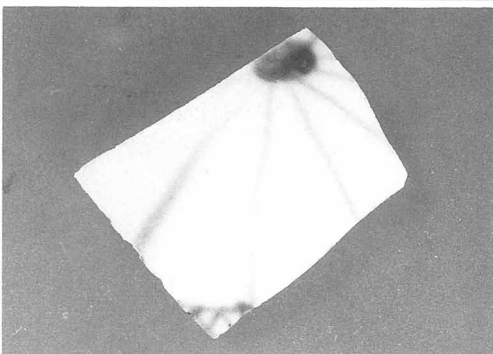
11. 染付碗  
(II区出土)



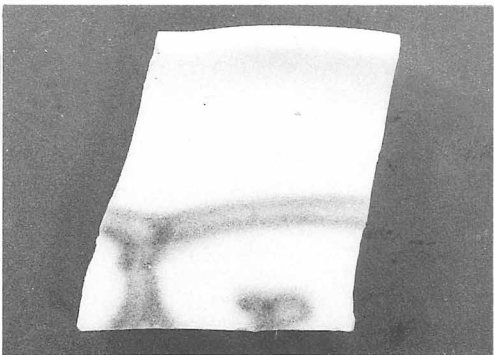
12. 染付碗  
(Ⅱ区出土)



13. 染付碗  
(Ⅱ区出土)



14. 染付碗  
(Ⅱ区出土)



15. 染付型紙摺碗  
(Ⅱ区出土)



16. 染付型紙摺碗  
(Ⅱ区出土)



17. 染付型紙摺碗  
(Ⅱ区出土)



18. 染付型紙摺碗  
(Ⅱ区出土)



19. 染付型紙摺皿  
(Ⅱ区出土)

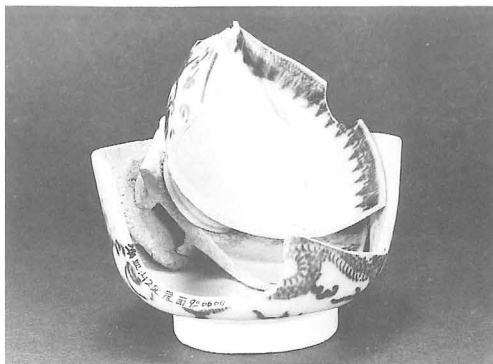


20. 染付型紙摺皿  
(Ⅱ区出土)





21. 染付型紙摺碗  
(Ⅱ区出土)



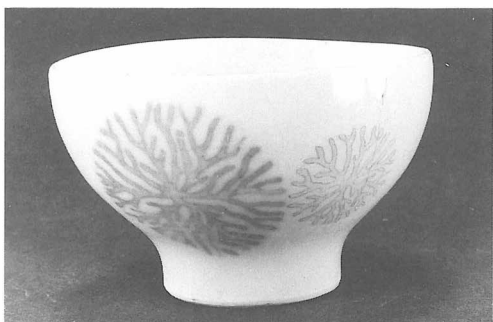
22. 染付型紙摺鉢  
(Ⅱ区出土)



23. 釉下彩型紙摺鉢  
(Ⅱ区出土)



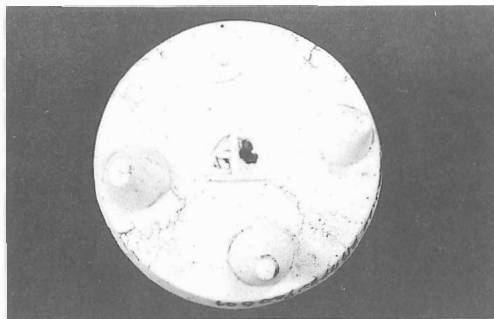
24. 染付銅版転写碗の蓋  
(Ⅱ区出土)



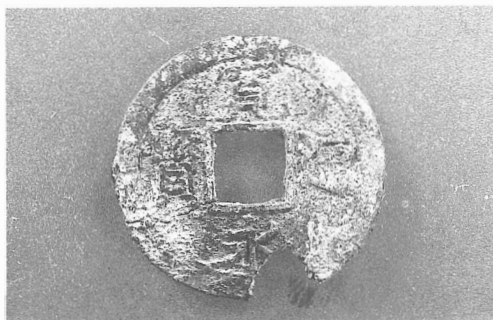
25. 釉下彩銅版転写小碗  
(Ⅱ区出土)



26. 釉下彩小碗  
(Ⅱ区出土)



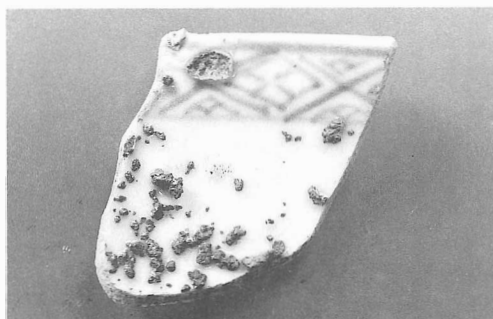
27. 4足付ハマ  
(Ⅱ区出土)



28. 古銭「寛永通宝」  
(Ⅱ区出土)



29. 染付碗  
(Ⅱ区南採集)



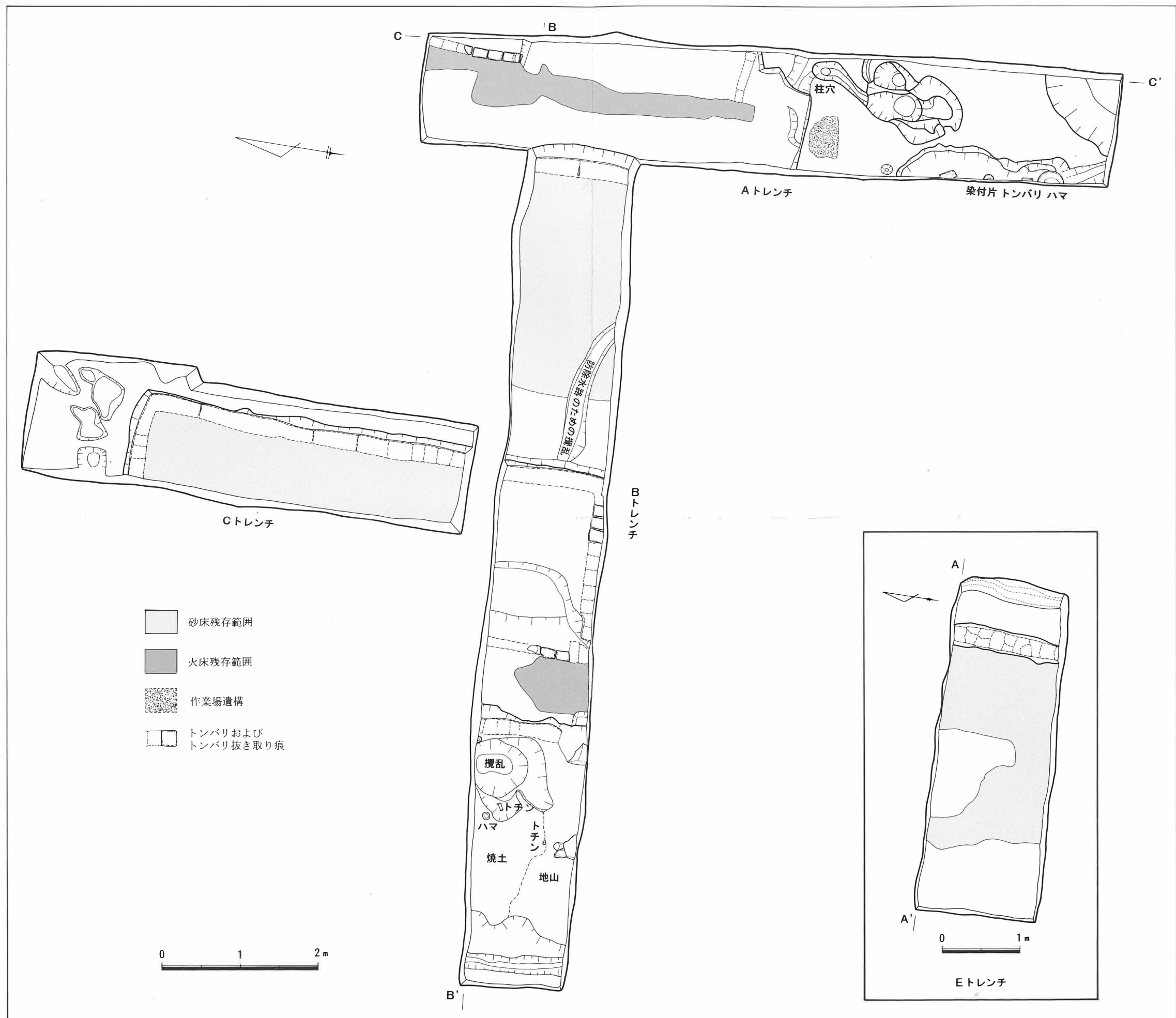
30. 染付碗  
(Ⅱ区南採集)



31. 染付型紙摺合子の蓋  
(遺跡採集)



32. 染付型紙摺鉢  
(遺跡採集)



付図 浜町皿山窯跡Ⅰ区A・B・C・Eトレンチ平面図(S=1/50)

肥前地区古窯跡調査報告書 第10集

## 鹿島市浜町皿山窯跡

平成5年3月30日

発行 佐賀県立九州陶磁文化館刊行会  
佐賀県西松浦郡有田町中部乙3100-1  
TEL 0955-43-3681

印刷 株式会社三光  
佐賀県伊万里市新天町287-3